

「全鍍連」 2016年 9月号 巻頭言

全鍍連副会長 森脇 隆 (森脇鍍金工業(株) 代表取締役社長)

「その秋をまたで散りゆく紅葉哉」



先日、全鍍連女性経営者部会（梅田ひろ美部会長）の総会が大阪市中心公会堂で開催されました。大阪の町が一年で一番暑い日と言われている天神祭の前日に、参加者 25 名が一堂に会し、女性ならではの優しさ、細やかさと同時にパワーとエネルギーあふれた議論が交わされ、建設的で実りの多い一日となりました。

会場になった大阪市中心公会堂というのは、北浜の風雲児といわれ、相場師として一世を風靡した岩本栄之助が現代の金額にして数十億円にのぼる寄付をし、それによって建てられたものです。重厚な造りの建物は明治の香りを漂わせる名建築で、歴史的な建造物として現在も多くの人達に愛されています。

1877 年（明治 10 年）に生まれた岩本栄之助は 20 歳の時、日露戦争に出征し、除隊後の 29 歳で家督を継ぎ、正式に大阪証券取引所の仲買人になります。ちょうど日露戦争終結を機に株が大暴騰し、「買えば必ず儲かる」という時代で、栄之助は手堅く買い方に回って大儲けしました。この時、北浜の仲買人の大半はいずれ暴落すると売り方に回っていましたが、株価の暴騰は収まらず、仲買人達は破産寸前に追い込まれます。彼らから売り方に回ってもらえないかと懇願された栄之助は、親の代からお世話になっている皆さんへの恩返しとためらうことなく快諾します。この結果、翌年には大暴落。お陰で仲買人たちは破産を免れただけでなく莫大な利益を手にし、栄之助も大きな利益をあげます。北浜の仲買人らは「岩本はんは足を向けて寝られない」と感謝されたと言われています。

1909 年 32 歳の時、財界が結成した渡米実業団に加わり、アメリカ合衆国を視察した栄之助は、米国の富豪の多くが財産や遺産を慈善事業や公共事業に寄付している事に強い感銘を受けます。その視察中に父の訃報に接し、その供養も兼ねて 1911 年、34 歳の時、大阪市に 100 万円寄贈すると発表します。

その後、いったん株の世界から身を引きますが、1916 年、39 歳の時、第一次世界大戦勃発による異常景気を目の当たりにして、「人のゆく道の裏には花の山」との格言どおり、売り方に回って相場を張ります。しかし、結果的に莫大な損失を抱え込み、その年の 10 月に自宅でピストル自殺するのですが、栄之助が生死の境をさまよった 5 日間、北浜の仲買人たちは「岩本はんを死なせたらあかん」と大阪天満宮で夜通しかがり火をたいて無事を祈ったそうです。その祈りも叶わず、10 月 27 日、彼は帰らぬ人となりました。

本稿タイトルの「その秋をまたで散りゆく紅葉哉」は、栄之助の辞世の句ですが、ここに出てくる「その秋」とは、中央公会堂が完成する 1918 年の秋をさしているのではないとも言われています。では、彼はなぜ「その秋」を待たずに命を絶った

のでしょうか。

おそらく、そこには大阪商人らしい考え方があったに違いありません。大阪というのは室町時代にすでに貨幣経済がはじまっています、この貨幣経済が独特の合理主義を生み出す基礎になりました。早くから大阪商人には独特の合理主義に基づいたモラルと高潔なまでの潔さと結びついた武士道にも比される商人道とでも呼びうるものが醸成されていて、栄之助はそれに殉じたと考えられるのではないのでしょうか。

親友の野村信之助（野村証券創業者・二代徳七）は「彼はあまりにもきれいすぎた。直情径行型でありすぎた。私は北浜で唯一の友を失った」と泣き伏しました。